大君の死と中の君の結婚

皇統の血の堅持

望月郁子

二

大君・薫双方の意識の基本的ズレ

大君と薫との関係は、京都貴族から相手にされず雰囲気して皇統に拡張した

八の宮の遺児と、多才と美男で時いてはいるが負の出生に苦しむ青年と関係であるが、実は、大君は皇統の気位の高い父の遺勲を尊守して結婚拒否の意志が強く、に対にする薫は往生のものであると信じて疑わない。一方、薫の性行為拒否の念を知るのはその告白を聞いた弁

に加えて、当事者である男女双方のこえいう意識のズレを基盤として、「絵角」の物語が展開される。

「絵角」の冒頭。八の宮の一周忌が近付く。「おばかのあるべかしさことどもは、中納言殿、阿闘梨などぞ仕うまつり
たまひげる。かかるよその御後見なのかばとみえたり。（17頁）というの宮家の実状である。薫自身も宇治を訪れ大君と語る。大君は八の宮家の責任者の立場で、八の宮家の誠意を示す薫に、それなりの距離を置きながらもおおよ
うに対応し、父の遺志と自身の意志を
「こののたまひげる筋は、いねしへも、さらにかけて、とあらばかからばなど、行く末のあらましことにとりまして、の
たまひおくこともなかなりしかば、はべれば：（17頁）と説明し、薫に中のはを測ることを思い絶ゆべく思おいてけるとみる思いをせ
はべれば：（17頁）と説明し、薫に中のはを測ることを思い絶ゆべく思おいてけるとみる思いをせ
と八の宮の遺志に対する自己流の解釈を強調し、一人の私性は絶まらない。弁は
「もより、かく人に違ひたまへる御黒どもは、はべればや、いかにもいかにかし、世の
物語は以下様々に展開するが、大君の基本姿勢に変化はない。薫は大君のために尽力するが、それはとてどむ目を傷つけてはならない。清らかな生
す宇治の山荘でこそ維持できるのであって、京の栄華の中に求める
の姫君には、精神的に傷つけられない。薫は大君のため
に追い込むで行くことになるのであるが、留意したいのは、大君の肉体の衰弱に薫が気付かないことである。
「2）薫の接近と大君の衰弱」薫は、大君のために尽力するが、それはとてどむ目を傷つけてはならない。清らかな生す宇治の山荘でこそ維持できるのであって、京の栄華の中に求める
の姫君には、精神的に傷つけられない。薫は大君のため
に追い込むで行くことになるのであるが、留意したいのは、大君の肉体の衰弱に薫が気付かないことである。

八の宮の死後、大君が健康体でなかったであろうことは、「椎本」の巻末、盛夏の暑さを宇治に避けた薫が垣間見った大君

−2−
の様子から察知される。

一黒木は一かさね、着たまへれど、絞を片手に持ちたまへる手つき、かられよりも細さまでて、瘦せ瘦せなるべし。

一黒木の着ているものに敏感で、なにかと世話をする薫であるが、「枯」を認めのみである。

一黒木の近付いた夜（上記）、薫は地浴。大君は「おはかたにてありがたくあれなる人の御心なれば、こよなくもも

てなしがたくて（19頁）、「箇に屏風をぞえて」対面し、

心地のかき乱り、やましくはべるを、たれらひて、óm方にもまた聞こえん（19頁）というのを無視して接近。大君

泣かれて、「おのづから心ゆるびとしたまふをりもありなむ」と呟くして明け方まで付合わせる。薫から開放されて大君

は、

この人の御さまの、あのめうちまぎれたるほどならば、かく見廻るる年ごろの申しに、うちゆるふ心もありぬべ

きを、恥づかしきに見えにくき気色も、なかなかみじつりつましくに、わが世はかくてすぐしはてむと思ひつづけ

きの日は「心地しこしてなやみ暮し」、薫からの文に「今朝よりいとなやましくてなむて、人つてにぞ聞こえたまふ

（19頁）である。

心地のかき乱り、」は大君の健康状態の直近の告白であったであろうが、薫は世間並の逃げとしか考えとめない。

薫が明けて薫を訪れた、心あやまりしてやつらばしくおぼゆれば、かく聞こえまひて対面したまはず（19頁）。曳の尼

の説得にも大君は応じない。女房たちは、薫の要望を入れ、大君の意に背いて、薫を手引きするが、大君は強政策に出

- 3 -
中の中の君を残して隠れる。薫は「なほつれなき人の気色、いま一たび見はてぬ心に思いひのどめ（20頁）」る。大君は一睡も
しない。周間へ到警戒を深める、一方で中の君には距離を置かれ、孤立する。
二十八日（二十六日とも。三日後）薫再訪。大君は薫が「（中の君に）（愛を移りにけり）」とほっとし、障子を隔てて
対面。薫は「障子の中より御袖をとらえて（22頁）」今夜、句宮を同道し、中君と結ばせたことを告白。大君は、薫に
と訴え、薫を許すが、ともに一睡もしない。
心地もさらにかきくらすように、いととなきまで、ここにうち休む、（袖を）ゆるしたまえ（21頁）
目もこの生の準備をし、続いて三日夜の準備と忙殺される。薫からは三日夜のための衣料下届けられる、三日夜着飾って祝
う女房たちを見ながら、「我をやうやう盛り過ぎぬ身ぞかし。鏡を見れば、瘦せ瘦せになりてゆく。…いま二年あら
ば衰へまざらぬ…（22頁）」と自覚する。
以上は、「総角」の前半を占める部分であるが、時間経過は半月足らず。大君に苛酷な急展開である。三日夜着飾って祝
う女房たちは見るのも、我をやうやう盛り過ぎぬ身ぞかし。鏡を見れば、瘦せ瘦せになりてゆく。…いま二年あら
ば衰へまざらぬ…（22頁）」と自覚する。
中君と句宮との急な結婚は、薫と結ばれた女を妹の立場で守ろうと願った大君を絶望に追い
込む。結婚拒否の意志をより固めさせた。但し、大君が見切りを付けたのは、宇治を訪れず、八の宮に侮辱を与える句
宮である。薫は評価されているものの、いつまでも現状を維持出来るのは難しく、そうなると薫と京都貴族の例外では
あり得ず、妹の二の舞を演じるのを避けられないと自覚する。大君は京都の貴族と接触に傷つけられる。また、大君の宮に対する認識は中の中の情と感じている。薫に対するそれも言葉と
レがある。

三日夜以後に大君は、薫宮から文が届くのみであるのを、「いと心にしに見じた思いしてものをを、身にまざりて心苦しまるかなるか（別章）」
と呪く。

九月十日、薫宮を囲うして来た薫を、薫宮に比べて「心は、人のどかに深くもののままであり、ありがたしと隠し知ら（226）
薫宮の「心は、人のどかに深く」は、薫宮がまっとあるとは思い至らない。薫の異常性故に大君が付合えているのである。薫に対して、それも言葉と

十日一、薫宮は丈治へ紅葉狩に訪れた。薫宮から繋がりを切った女性側は準備を整えて待ったが、事が劇、中宮の命を

」かく見劣りする御心を、かすかに中納言もいかに思ひたまふらむ。ここ又に、今のおの思ふらむが人笑へにをこ

- 5 -
この红叶狩は、薫が句宫を「そのかし、⑪行」で実現したもので、それに先立って薫は句宮の中の君との仲を「あなたがちに隠こちらへ、⑪行」であったからこそ、事が露見し、句宮の宇治行の目的が達成できなかったのである。計画を宇治に告げる期待を抱かせたのにも薫である。薫自身は「なかなか頼めきこえるをうねはしきわざかなとおぼえ」で、それ以上、

「例の人めきたる住まひならば、かうやうにとてなししたまぶまききをなど（226頁）」

と大君は妹をあわせ、

「なば我だに、さるもの思いに沈ます。果などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむと思し沉むに、心地もまことについたるに苦しければ、物つゆばかりまるらず、ただ亡からぬ後のあらましをを、明け暮れ思いつづけたまふに（226頁）と大君は妹をあわせ、

この一節は、大君が死んでしまいたいと心底思ひ、「心地をまことに苦しければ」という状況下で、食事を切取らずに自然な食事拒否を選んで、その実践に入った。読むべきである。皇統にある人を絶食死の前例にはいうまでもないが早良親王がある。以後、大君は床についたまでである。

その後句宮は、内裏に足止めされ、夕霧の君との隷宮を押しつけられるが、中の君を「御心にかからぬをりく、恋しくうしろめたしと思す（228頁）」一方向、ことを聞いた薫は、「わがあまり異様なるぞや。さるべき契りやあらけむ。⑬悔しくもありけるかな。いつれもわがものにて見ただまつらむに、咎むべき人もなししかむし、とり返すものならねど、をこ
大君が「なやましけにしたまふ」と聞いて「図頁」と薫宇治訪。大君臥床のまま応答。薫は答に「うしろめたくは、よに
あらじとせん思ひはべる」と弁護。薫が御修法の手配をするのを、大君は「いと見苦しく、ことさらにもいはしき身を
件を薫の供人から聞いて女房が話すのを大君が耳にし、図頁に絶望。『いと見苦しく、ことさらにもいはしき身を
信じているが、大君はそれを見抜けず、来訪のないのを恨む。
図頁を宇治へ行かせることが大君にせぬをってきての慰めを与えることであり、中の君の妹君への立場も幾分なりとも立て
ることになるが、ここ来て薫は図頁に、をさをさ参りたまはす。山里にいかにいかにととばら（図頁）う。図頁に対して
にし後、いと心の思ひたるさまにて、はかさき御くだものだに御覧じ入れざりしつもりにや、あさましく弱くなり
と説明する。「枕上近くでものの聞こえたまへど、御声もなきやうにて、えいらへたまはす」という衰弱ぶりである。薫は
朝廷に欠勤届を出、修法・読経など手を尽くして付きで看病する。
大君は意識だけははっきりしている。「ひたおこにもありながら（25頁）近接する薫を
むなくなりなむ後の思い出に、心こころ、思い際なからじとつとみたまひて、
死後、薫の心に残る自分を大事にしようと神経を使う一方、
阿闍梨の夢八の宮が現われたと聞き、「
かなました名列前茅はざるざき参でて、同じ所にも（28頁）
と願う。」

（26頁）

「ありかなるついてにいかどうせむ。このきみのかくぞひるて、残りなくなりぬるを、
ならば、病にことつけて、かたじをも変へて（30頁）た
とリアルに思案の末、中君に出家を求めるが女房たちに阻止される。

風雪が荒れ「光もなくて暮れはて（32頁）た荒明の夜
付き添い見守る薫に大君は「顔はいとよく隠し」たま、「も
のの枯れゆくやうにて消えはて（34頁）た。

（28頁）

「かくはかかかりけるものを、思い際のやうに思されてたりつるもかひなければ、
思ひこえたまえとほのめかしけこえに、違へたまはざらましかば、
うしろやすからせしと、これののみむ恨めしき
節にてともりぬべおぼえはべる（38頁）」

が、薫に言う最後の言葉である。今はの際まで口にせず忍んで来た大君の音言である。怒りや懐かしさが形をもって現われな
夫婦生活を見守る以外に、生き続ける道の無い大君であったが、薫は、この期に及んで、大君と結ばれること以外念頭に
ない。自分の裏切りが、大君を死に導いたとも、大君の往生のほどにすることを大君である。

最後まで、大君の意識は、あくまで上位を保持した大君である。

大君の死は、零落した宮家の病弱な姫君が食欲を無くして、薫との結婚に至らずに終わったという類のものではない。源氏
は、京都貴族の理解を摂えている。大君は断食という自然で実現的な方法で自殺に成功した、そうすると、大君の死に至る方法を、

したがって死を待つ、皇統の姫君に達明は無縁である。大君の死が、宮中で天皇が新妻を食し群臣に賜うは、達明の死は、大君の

自らの死に至る方法を、大君の往生のほどにすることを大君である。

故姫君の、いとしめねがに、かうなきまにの、何と、もろもろの、心の底のしあわせ、かう、

取らず合わないことをいうが、皇統の直系としての、気位に支えられて、父宮と共に、貧困に敗れず、

の取り締まねざさである。
取り持ちについて、当初「大君が...いとはしく、もううちに思い出すばかりつまる（薫の中の君にという）ありさま

とも違ふやとうむも情なさゆるを、さりとて、さ、は、え思ひあらたむじくおぼゆれば、（中の君を句金に）譲りきこえて、いつ方（大君・句金）の根みを負はじなじ（箇頁）と想え、（宮に）おはしますべきやや、どこかに更こえ

まつその心おきてを違へんとて、急ぎせしこざらけ（箇木44）である。回想でいうのが本音で、句金が格好の手段とさ

ったのである。（前節のちなみで言へば、当初、薫は、身分の高い句金に中の君を譲れば大君も納得すると単純に見てい

た。）

薫の手引きが契機ではあるが、句金と中の君は一夜にして結ばれたのではないか。『椎本』の冒頭の宇治の桜狩以来、中の

君は父八の命を勤めに従って、句金と社交としての歌を贈答を重ねて来た。八の宮が死を予感して姫君方を譲る人がい

ないと喰く項（箇文）の文は「三の宮を、なは見ではやまじと思ず御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。（箇頁）とい

う。父宮死後、句金の権柄をは築けりとし、句金の気持ちを歌に託すが、「あるまじきことかな」と動じず、「ささ放ち」「つれなき」「返歌をする

箇頁」られてもよって返歌を書いた。箇頁

二日目には、中の君は、暗れ着を着さされて泣く。髪を撫でつくるものに、大君が自分は知らなかったと言ってしま

い「箇頁」が足は途絶え。人笑へ見苦しきこととそして、（大君に）見あつかはれじてまつらむがいま

じさをよろずに思いあるたまへり（箇頁）と。今後の大君の苦しみを先取りして悩む。遠路訪れた句金が
心深げに語らひ頼めたまへど、あはれともいかにとも思ひざきたまへず
はかにき御いらへにて言ひ出でんたなかつつみたまへり（第23頁）
であった。中の君も、大君同様、八の宮の遺釈を守り、京の貴族に対する不信は強い。

それが三日夜の明け方となると、

久しぶりとたえたまはむは心細からむと思ひならるも、我ながらうたてと思ひ知りたまふ（第23頁）であり、京へ帰る

句宮の弛捲の歌

中絶むものならなくに橋塊のかたしく袖や夜半にぬらさん

に対し、中の君は

絶えせじのわがたのみはや營治橋のたれけき中を待ちわたるべき

と字治に来れない句宮の実状を理解し、自己の意志を「絶えせじのわがたのみにや」と表明した返しをする。

「たくひ少なげなる朝明の姿を見送りて、なごりとまれる御移り香なども、人知れずものあれば（第23頁）となりて。

句宮は、「大宮の聞こえたまひしどまど語りここえたまひて思ひながらとだえあらむをいかなるにかと思ひなさ。

たねにかく

が、それを振り切って字治へ来た。句宮の語った「大宮の聞こえたまひしどまど」と筆者に厳重注意を受けた（第21頁）

という。句宮は、当日、内裏で大宮母明石中宮から早く身を固めて、忍び歩きをつつしめと厳重注意を受けた（第21頁）

に求める。三日夜より後の語りであるが、(①②③)がある。
もし世の中移って、帝、後の思いをもつままに、人より高きままにこそなさめど（「深町」）〜も

① 御心にて思ふ人あらば、ここに参らて、例さまにのどかにてなしたまへ。筋すこと思いきこえたまへる

② 三日夜の約十日後、宇治より帰京後の匂宮の思いである。

③ ねひばたるやうに人の聞こゆべかめるも、いとむ口差しと、大宮は明け戸略課えたまへる

終って匂宮の禁足が厳重になった中で、大宮が匂宮に直接諭めて言う言葉である。

④ 上の御代も未になりやくとのみ思いのたまふを、……まして、これ（匂宮）は、思ひおきてこることもかなは

中宮にそれだけの美質があり、これこそ匂宮に確認できたからには、して、新婚早々の三日夜、今後、通ってこない実状を中宮に納得させには、

匂宮自身の極秘の特殊事情を説明し、中宮が匂宮にとってかがえのない女性であることを本人に自覚させなければなら

ないであろう。匂宮は、東宮候補であることを打ち明けて中宮の信用を得、おそらく中宮に東宮君としての将来

〜 13 〜
約束し、この結婚の重要性、なぜ中宮でなければならないか（後述）をその君に判らせてのではなかったか。匂宮と中宮との三年日時の愛情は、そういった語らいであったのではないか。匂宮は匂宮を、今更もたれに来れないのを承知で、受け入れたのではないか。匂宮は匂宮が精神的に苦痛に陥らざるをえないをめになる。

「中納言の主に心のどうなる気色きそうや、しまへり、匂宮が、のたまへば、女君あやしと聞きたまふ、行方、

（神無月晦日）はかなく人を見たまふにて、さるは（中宮が）御心に離るるをりなし。左の大殿のわたりのところ。

中宮にふらき目はいかでか見せむと思ふ御心を。匂宮は、知りたまはねば、月日にせてもをのみ思ふ。（28頁）

（中宮）

匂宮

（匂宮狩りが露見して匂宮の禁足が厳重になる。匂宮は、まして、（中の君が）御心にかからぬをりなく、恋しくうしろめ

たいと思う。（28頁）

（匂宮）

（匂宮）

（匂宮）

（匂宮）

（匂宮）
さりとこをがよきねは思いちろらに、おほかかなきはりなきさをこはもしたまふらめと、心のうち思いし慰めたまふ

大君死。
 emphathize ようになるほど君が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つべき

方 ようになるほどこ が、もはやhwnd 東に 待つすべき
出逢いことにもあらねば、命のみこそ。（宿木62頁）と、中の人を慰める。句宮の将来は、「宮たちと聞くうる中にも、筋ことにも世人思いきこえたれば、幾人も親しめたらまはんこととも、もときあるまじけれは（宿木63頁）と、世人にも知ら

翌年二月はじめの晴に、中の人、男子出産。句宮の第二子であり、七日夜は後の宮の御産養が盛大に催された。出産前夜、句宮の六條院で薫昇進の祝宴があった。句宮も出席したが、中の人出産が気掛かりで早々に引き上げた。それ故に大殿の御方には、「いとあがせめざまし」とのたまふ。地の文は「劣るべくもあらぬ（中の人）御ほどなるを、ただ今の

名の孫、それも次期東宮の長男としての誕生である。句宮は句宮に好感を持たない。「ゆかしがなき仲にひらするうちに、大臣のことごととしくわざるはして、何ことの紛れをも見とがめられんがむつか

く思はね…（宿木40頁）」

「いと事うるはしげるあたりにとり篭られて、心やすくならひたまるも、ありさまのところせからんことをなす苦

句宮は、春宮（第一皇子）に長女を、二次の坊がねに、いとおぼえることに重々し、人柄をすくよくかになんものしたまま

ひける（宿木12頁）と第一皇子に次女を請らせた。美質はあるが典侍腹の六の君を落葉の宮の養女とし、いといくし

い・17・
くはもたなかったはずです（後がぬ教育はせず、いまかけじをかじきやうにもの好むせさせて、人のつけじのよによるのきも。

後宮・薫のどちらかにと考察していた。後宮には後ノ爾かれ続け、宮がその方を一条院に迎ええて後

薫にと話向けたが断られ、薫が帝の女の一の宮の妻に内定した後、一の宮を後宮と結婚させたのである。物語はその婚約

を描いて「一条院の天皇を、春宮に参らせたまへるより、この御當をば（後院か）ことに思ひおきてきえたまへる

も、宮の御おほえありさまからなめり（宿木17頁）という。巻霊は次の処がねを二の宮と決めていたのである。巻霊が六の君の言に乗り気になかったのは

六の君の婚約は、巻霊の将来の秘密を「世人」が知るに至った時である。巻霊が六の君の言に乗り気になかったのは

巻霊の人柄もすることができ、巻霊の将来に対する巻霊の思惑を快く感じていなかったこともあった。

帝が巻霊の政治介入を排斥し、天皇親政をモットーとしていたことを示唆する。巻霊を天皇親政をなすとする

大体、巻霊は、若くより「わが御心より起こらざるむことなどは、ささまじく思すべき御気色（巻霊12頁）」であった。

巻霊のことを、巻霊の将来に対する巻霊の思惑を快く感じていなかったこともあった。

巻霊にとって、後の条件には、親族に外戚として政治への口出しをする者がいないこと、巻霊の血縁が濃いこと、巻霊にふさわしい教養を身につけていること、巻霊のことを思い描いていること、巻霁のことを示唆する。巻霊を天皇親政をなすとする

巻霊が関心を抱いている女性に冷泉院の女の一の宮（巻霊20頁）、紅梅大納言の女の一の宮（巻霁12頁）、真木柱腹の故定兵部卿宮の姫君

巻霁が関心を抱いている女性に冷泉院の女の一の宮（巻霁20頁）、紅梅大納言の女の一の宮（巻霁12頁）、真木柱腹の故定兵部卿宮の姫君
（紅梅）がある。そういう女性を手中に収めようとするのは、源氏がそうであったように政治的思慮が関わってであろう。

（二四）帝室四代目に至っての天皇親政の安定、源氏物語は東宮空位の時代から始まる。不穏な政情のなかで桐壱帝は右大臣の女御宏権殿が第一皇子を東宮に立てて右大臣側を依拠した上で、先帝の四の宮藤壱を迎えて皇子（冷泉）をもって親政を固めて退位した。藤壱の内実は、故桐壱更衣への恋慕からと説られているが、皇統以外の外戚の政治的介入を阻止しない、親政をめざす桐壱帝の意志が強化されていると考えるべきである。

朱雀帝の時代は外戚（右大臣勢力）が実権を握るが、桐壱帝の二代後藤壱に遅れを示す光の夢に現われ、内裏に行き朱雀帝を退位させる。「一言い換えれば、光を救い、退位時には桐壱帝が立てた東宮（冷泉）を即位させて、遺志の実現へ導く。」

冷泉に秋好を入内させ中宮とし、藤原の氏の長者（内大臣）の娘藤壱殿を抑えた。今上（朱雀の第一皇子）と光の娘明石中宮の時代。今上の「御代も末になわりゆく」下宿木の時点では、今皇帝に明石天皇宮の東宮・二の宮、三の宮、五の宮が、更衣服の四の宮が存在し、さらに永い記憶と安否を心配している。源氏物語の描く光没後の桐壱帝の皇統の繁栄と安定は素晴らしかった。

対するに、藤原氏の長者レ家は、紅梅の巻に見えることと、紅梅大納言には、後添いの真木枝との間に若君が一人という先細りである。紅梅の兄柏木の実子頼は、子孫を残す意志がない。
思うに、源氏物語は、宮中を中心とする様々な男女の様々な人間模様を描きながら、政治を表に出しこそしないが、天皇親政の如何にして実現させ得るか、桐壇帝と光を軸に模索した、帝室制度に於ける物語であるか。その根拠は、八の宮を当時の東宮冷泉の対立候補としてかつて、一生を含むにさせたのは、源氏物語においての宮の選ばれし藤壇・秋好の果たした役割（外交政治に介入させない）の重要さも知られていてある。八の宮は零落しているとはいえ、八の宮の親王の育てたとの見もある。上記のとくであるとすれば、源氏物語では、八の宮がを、八の宮と中の君とが結ばれるに、二人がそれぞれ厳しい辛苦に耐えなければならない。大君の凄惨な死に方・残された薫の絶望とともに、一方の「総角」の巻の冷徹に厳しさ、容赦なさより、紫式に生じる。